

書評 「壮大な無限旋律」中村喬次

瀬戸内町与路池地出身で奈良在住の彫刻家・栄利秋氏の「作品集」が、大阪の出版社・海風社から刊行された。氏の、60年に及ぶ足跡を網羅した集大本。木や石の天然材を主体にプラスチック、ポリエステル、アクリルなど身近かな合成樹脂を素材に、大小さまざまなモニュメントやオブジェを作りあげている。

大は、赤穂義士ゆかりの地・兵庫県赤穂市の東浜公園に建立された日時計、奈良のJR平城山（ナラヤマ）駅前、河内長野の赤峰市民広場、横浜市立大学医学部のモニュメント。これらの作品には〈宇宙 天と地と太陽〉の表題が振られている（赤穂のみ「海」が加わる）。栄氏ならではの気宇壮大な自然賛歌だ。

日時計は通常、物の影で時を計るが、一連の作では垂直に入ったスリットを通過する太陽光が時を刻む。緻密な考案に基づく世界初の日時計として評価が高い。

「作品集」の表紙を飾るブロンズは、これは何だろう。巨大な球体を四つ切りにしたような、一見プロペラ状のモノが、今にもうなりをあげて空中に飛び立つような、妖しい幻覚をさそう勢いを秘めている。〈燦〉シリーズの代表作だろう。

かと思うと、巨大サイコロが群れをなしてアクロバットを演じているようなあやうい均衡の妙をみせる〈落日あるいは挽歌〉、〈華／詩／夢〉など、作者はよほどこういうモチーフがお気に入りのようす。さながら作曲家が、一つの主題から千変万化のバリエーションを紡ぎだすあざやかな手並みを見るようだ。

初期の作品で目立つのは、「かな」シリーズだろう。「KANA」とか「かな」と表記を変えながら、無限旋律を奏でてゆく。加計呂麻島の〈島尾敏雄文学碑〉も、表題こそ「であい」だが、要するに「愛（かな）」である。こちらも碑の中央にスリットが入り、円の合体で「であい」となる。

栄氏は1937年（昭和12）、当時鎮西村と呼ばれた離島与路池地に生まれ、奄美復帰の前年、鎮西中学池地分校を卒業、沖縄に移住。米軍作業に従事しながら沖縄電気学園（夜学、那覇市）に通学、復帰の翌年上阪、大阪府立市岡定時制課程に入学、港湾労務者の弁当運びで大八車を引くなどの仕事をへて1959年大阪学芸大学（現・大阪教育大）学芸学部で美術を学ぶという“苦学の人”。

竹下内閣時の「ふるさと創生事業」政策で奈良市が「彫刻のある街づくり」を名乗り、その第一号に栄氏の「華」が選ばれた。この華々しいデビューがきっかけで、続々と意欲作を手がけることになり、全国的に知られる存在となった。この辺の経緯は、巻末の人物評「栄利秋とは何者か」に詳しい。筆者の作井満氏（故人）も徳之島は伊仙町出身の熱血漢。版元海風社の初代社長であり、島っちゃん同志、肝胆相照らす仲であった。現在同社は、二代目文字子夫人が堅実な運営を仕切っている。